

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593364

研究課題名(和文) 未成年の子どもを持つ母親の病いと共に生きるプロセスに関する領域密着型理論の構築

研究課題名(英文) Development of a practice theory explaining the experiences of mothers suffering from an illness

研究代表者

近藤 真紀子(前田真紀子)(KONDO, Makiko)

岡山大学・保健学研究科・准教授

研究者番号：70243516

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文): 目的: 病いと共に生きる母親の体験を記述する。方法: 病いを持つ母親に半構造化面接を行い、質的帰納的に分析した。結果: 1. がんの母親(7名)は、自分の死後、子どもをどうやって育て上げるのかの意思決定と、家族の危機と家族関係の変化を示した。2. 切迫早産(第2子)の母親(5名)は、第2子の救命を優先して意思決定し、第1子への母親役割を父親や祖父母に委譲した。3. 慢性疾患の母親(6名)は、体調不良を理解されない辛さ、母親-患者-職業人の役割葛藤を示した。4. 病いをもつ母親の普遍的体験は、母親の発病による悪影響を最小限にして子どもの現在と未来を守る、母親役割の代替を手配して代替者の過労の心配であった。

研究成果の概要(英文): This study aimed to explain the experiences of ill mothers. Method: Semi-structured interview. Data were analyzed using the constant comparative method of the grounded theory approach. Result: 1. The experiences of 7 mothers with cancer were related to decision making, the care of children after their death, and changes in their relationships with family members. 2. The experiences of 5 mothers with imminent abortion were related to deciding to protect the baby in their womb and entrusting the care of their existing child to their husband and aged parents. 3. The experiences of 6 mothers with chronic illnesses were related to worrying about their distress not being understood and role conflicts as a mother, patient, and worker. 4. The universal experiences of all the mothers included 1) developing strategies for minimizing the negative influences of their illness on their children's present and future and 2) entrusting their role to their families and worrying about them being overworked.

研究分野: 看護学

キーワード: 慢性期看護 家族看護 親子関係 理論構築

・研究開始当初の背景

エリクソンによれば、基本的信頼・自律性・自発性・勤勉性・自己同一性・親密性・世代性・自己の統合といった発達課題を、段階的かつ最適時に達成することが、その人の円満な人格の発展と人生に対する満足感をもたらす。

壮年期の発達課題は、親密性・世代性であり、子どもを産み育てること、すなわち、母親役割を遂行することが、自らの発達課題の達成に繋がる。母親役割とは、「子どもの衣食住を整え、所属や愛情の欲求を満たし、価値観や生活習慣を形成し、社会化の基礎を作ること、子どもの人間形成や成長発達の基礎を作ること」と定義され、実質的かつ情緒的役割が期待される。

一方、子どもにとっても、健やかな成長発達に母親の存在は必要不可欠であり、子どもの年齢が低い程、その傾向は強まる。ポウルビーによれば、乳幼児は母子相互作用の中で母親との絆を形成し、それを基盤に外界との関係を発展させる。

以上から、母子は互いの発達課題の達成に深く関与する関係性にあり、母親が病いを有することは、子どもの成長発達への影響が甚大である。したがって、多大な苦悩を感じることなく母親役割を遂行でき、子どもの健やかな成長発達への悪影響が最小限になるよう、病いをもち母親を支援する必要がある。

・研究の目的

未成年の子どもを持つ壮年期の母親の病いと共に生きる体験を記述する。

母親の体験は、母親の有する病いの種類によって異なる。本研究では、グラウンデッド・セオリー・アプローチの継続比較分析の手法を用い、病いの種類による母親の体験の違い、および病いの種類に関係なく共通して認められる普遍的な母親の体験の両方を明らかにする。

・研究の方法

1. 対象：未成年の子どもを持ち、以下のいずれかの病いを有する母親で、研究参加に同意の得られた者。

病いの種類は、がん、切迫早産(第2子)、慢性疾患とする。

がんを選択する理由は、母親が死を意識する可能性が高く、子どもの成長を待たずして死を迎える可能性が少なからずあり、専門的な支援を必要としていること。

切迫早産(第2子)を選択する理由は、長期安静臥床・長期入院などで、長子の母親役割の遂行に支障を来すが、妊娠出産という喜びの体験であること。

慢性疾患を選択する理由は、母親の死の可能性は低いが、治療に伴う様々な制限や後遺症により、母親役割の遂行に支障を来す可

能性があること。

以上の～の病いは、各々の特徴が明確であり、継続比較分析を行う上で、妥当だと判断した。

2. データ収集方法：

インタビューガイドに基づく in-depth interview. インタビューガイドは、病いを有してから現在までの関心事と心情、子どもの関する思い、夫や両親に対する思いなどとした。

3. 分析方法：

1) ケース分析：

ケースごとに、逐語録を熟読し、母親としての体験を語っている部分を抜き出し、対象者の表現に忠実で簡潔な一文で表現する。意味の類似する一文を集めて、含まれる意味を表現し、ラベルとする。

2) 病いの種類別の分析：

がん、切迫早産(第2子)、慢性疾患の各々の病いについて、別々に分析を行う。各々の病い毎に、該当ケースから得られたラベルを熟読し、意味の類似するものを集めて、そこに含まれる意味を下位カテゴリーとして表現する。同様の作業を繰り返し、《サブカテゴリー》へと抽象度を高める。

3) 継続比較分析：

グラウンデッド・セオリー・アプローチの継続比較分析の手法を参考に、がん、切迫早産(第2子)、慢性疾患別の母親の体験を表す《サブカテゴリー》を比較検討し、病いの種類に関係なく共通する普遍的な母親の体験を【カテゴリー】で示すと共に、～の病いの特徴を明確にする。

4. 倫理的配慮

研究参加は自由意思に基づき、研究参加を辞退あるいは中途辞退した場合でも、何ら不利益を被ることはないこと、得られたデータは、研究以外の目的で使用せず、秘密は厳守されること、話したくない内容を無理に話す必要はないこと、研究目的および研究方法などについて、文書と口頭で説明し、同意を得た。面接中・終了後の回復者の言動に注意し、語ることによる苦痛を伴っていないことを確認した。本研究の研究計画書は、岡山大学大学院保健学研究科看護学分野研究倫理委員会の承認を得た。

・研究成果

1. がんを有する母親の体験

がんを有する母親7名の体験は、《子どもをどうやって育て上げるのか》という意思決定と、がん罹患後の家族関係の変化に集約された。

1) 子供をどうやって育て上げるのかという意思決定

(1) 死を覚悟した患者は、《子供のために生き

られない深い悲しみ》を表現し、《夫に愛情と信頼》があるか否かによって、その後の意識内容に変化が見られた。

- (2)《夫に愛情と信頼》がある場合は、夫に子供の将来を托す 夫の再婚家庭に子供が早く順応できるように自分の生きた痕跡を消す 夫の教育方針に口を挟まない など、《夫の幸せに子供の幸せも賭ける(死別後に夫が幸せになることに子供の将来を托す)》ことを選んだ。
- (3)《夫に愛情と信頼》が持てない場合は、子供のために最期まで闘い抜く 子供の現在の一大事に専念し、それをもって母親役割に区切りをつける 夫以外の信頼できる人に子供を托す 子供の生きる力を引き出す など、《自分の死で頼る人を失う子供を育て上げる手立てを考えた》。
- (4)自分の死後の心配は、《夫に愛情と信頼》がある場合は《子育ての全ての責任と負担を負う夫の心配》であったが、《夫に愛情と信頼》がない場合は《母親の死で頼る人を失う子供の心配》であった。《愛するわが子を残して逝く忍び難さはどうにもならない》は、両者に共通して認められた。

2)がん罹患後の家族関係の変化

がん罹患後の家族関係の変化は、血縁関係が強化されるか、夫婦関係が強化されるか、関係性に変化がないかの3群に分かれた。

(1)血縁関係強化群(2事例)：

がんの衝撃に、(実母 私 子ども)と(義母 夫)の各々のペアで揺れ動き、子どもの日常生活を主に実母が支えた結果、(実母 - 私 - 子ども)の関係が強化され、夫は居場所を失った。母親の死後の子どもの心配は、頼る人を失う子どもの心配であった。

一方、以下の逆のパターンも見られた。がんの衝撃に、(実母 - 私)と(義母 - 夫 - 子ども)の各々のペアで揺れ動き、子どもの日常生活を主に義母と夫が支えた結果、(義母 - 夫 - 子ども)の関係が強化され、私は居場所を失った。母親である私の死を悲しまないであろう子どもに安堵する一方、母親を慕わなくなった子どもに遣る瀬無さを感じた。

(2)夫婦関係深化群(4事例)：

がんの衝撃に(夫 - 私)で揺れ動き、夫が主となって子どもの日常生活を支えた結果、(夫 私 子ども)の関係が強化された。自分の死後の子どもの心配は、一人で子どもを育てなければならない夫の心配であった。

(3)変化なし群(1事例)：

双方の両親・きょうだいから十分な支援を得て、夫と子どもの日常生活・精神状態に悪影響がなかったことから、夫婦関係・親子関係に変化はなく、惜しめないサポートを提供した義父母への感謝の念から、(義父母 - 私)の関係が強化された。

3)がんを有する母親の体験の特徴

母親は、がん罹患することで死を意識し、

子どもをどのように育て上げるのかに苦慮している。夫との関係性によって、母親としての意識内容に違いが見られることから、夫との関係性のアセスメントが重要となる。

2. 切迫早産(第2子)の母親の体験

1)切迫早産の母親の体験

切迫早産(第2子)で入院中の母親5名の体験は、以下の5つのサブカテゴリーに集約された。

《突然の安静と入院により、第1子の育児を肩代わりする両親・夫への過負担の心配》

《入院により、母と離れる第1子の寂しさや悪影響の心配》

《突然、帝王切開や母体搬送になる先の読めなさに対する不確かさ》

《第2子の命を守り、障害なく生まれることを第一優先に考え、安静を順守する》

《障害を有する/多胎で生まれてくる第2子の育児は、育児経験があっても手探りとなり、夫・第1子・両親らと共に万全の体制を作る》

2)切迫早産(第2子)の母親の体験の特徴

母親は、一貫して子どもを守り育てる行動をとっている。第1の特徴は、流産を予防するための母体の安静を優先し、第2子の生命を守り、障害を有して誕生するリスクを低下させる。また、障害を有するリスクの高い第2子の誕生に備え、養育のための万全の体制を整えようと試みている。

第2に、第2子に対する母親役割(胎内の生命を守ること)と、第1子に対する母親役割(日常生活の世話)は、相矛盾する行為となるため、夫や両親の支援を得ることで、この2つの相克する行為の両立を図っている。

以上から、母親は、第1子と第2子(胎内)の命を育み育てることを目指し、矛盾する母親役割行動の調整を試みている。

3. 慢性的に経過する病いをもつ母親の体験

1)糖尿病(糖尿病性腎症を含む)の母親の体験

糖尿病(糖尿病性腎症を含む)の母親2名の体験は、以下の5個のサブカテゴリーに集約された。

《透析の頻度・間隔を守る体調管理と、学校行事への参加の両立を図る》

《病気であることを、母親役割の実施できない理由にしない》

《透析後の体調不良を含む病気の苦しさを理解できない子どもは、母親をこき使う》

《遠い将来の死を意識して、子どもの自立と巣立ちを意図的に促す》

《私と父の看病をする高齢の母親の過労を心配する》

2) 膠原病を有する母親の体験

膠原病を有する母親2名の体験は、以下の5つのサブカテゴリーに集約された。

- 《子どもが体質を受け継ぐ心配》
- 《闘病と子育てを優先するために、働き方を変える》
- 《入院時と体調不良時の子どもの世話に苦慮する》
- 《突然の病状悪化に怯え、過労を避ける工夫をするが、小さな子どもの世話でままならない》
- 《がんと違い、子どもを成長を見届ける時間的猶予があってよかったが、将来は不確かなものとなった》

3) 脳外科手術の後遺症を有する母親の体験

脳外科手術の後遺症を有する母親2名体験は、以下の5個のサブカテゴリーに集約された。

- 《緊急を要する症状出現時に、救命に一役買う幼子に感謝する》
- 《痙攣発作を見た子供のトラウマを心配する》
- 《母子を受け入れサポートする拡大家族への感謝》
- 《発作を予防するために過労を避けたいが、家事育児と仕事の両立で過労は避けられない》
- 《良性疾患でも死を意識し、子どもの将来を見越して、自立した行動がとれるように躡ける》

4) 慢性疾患を有する母親の体験の特徴

糖尿病(糖尿病性腎症)・膠原病・脳外科手術の後遺症を有する母親の体験は、第1に、病いを持って母親役割を遂行する苦しさを、他者(夫や子どもを含む)に理解されにくいこと、第2に、病気の悪化を防ぐためのセルフケア行動・母親役割の遂行・社会的役割の三者の間で、役割葛藤が生じること、第3に、目前に死は迫っていないが、遠い将来に死があると自覚することで、有限の時間の中で子育てを行う自覚が芽生えることである。

4. 病いを有する母親の普遍的な体験

がん、切迫早産(第2子)、慢性疾患を有する母親の体験は、上記に示した通りである。これらの体験に共通してみられる母親の普遍的な体験は、以下の2つのカテゴリーに集約された。

1)【母親の発病による、子どもの現在および将来への悪影響を最小限にする方策を考慮し、子どもの健やかな成長発達を守る】

がんは当然のこととして、慢性疾患であっても、近いあるいは遠い将来に自己の死があることを自覚し、有限の時間の中で、いかに子どもを育て上げ巣立ちを見届けるのか考慮していた。子育ては約20年間の長い歳月をかけて行うが、その間の母親の命が保

証されなくなった時、自分の存在の有無に関わらず、子どもが自立し社会に巣立っていける方策を考え、手立てを打つ。また、切迫早産においては、生命が危機に晒された胎児の命を守り、五体満足で生まれることを第一優先としている。

これらは、母親の寿命に左右されることなく、子どもの将来と健やかな成長発達を守る母親役割である。

2)【入院時・体調不良時の母親役割の代替者の手配と、家事育児・仕事・看病を担う夫や両親の過労の心配】

母親役割とは、「子どもの衣食住を整え、所属や愛情の欲求を満ち、価値観や生活習慣を形成し、社会化の基礎を作ることで、子どもの人間形成や成長発達の基礎を作ること」と定義され、実質的役割と情緒的役割の両方が期待される。子どもの年齢が小さい程、実質的な役割が大きく、母親の体調不良・安静指示・入院などは、実質的な母親役割の遂行を妨げる。年齢の低い子どもにとって、実質的な世話を受けることは必要不可欠であり、他の養育者(父親や祖父母など)が母親の代わりに担わなければならない。父親や祖父母は、これまでに担っていた様々な役割に加え、子ども(孫)の養育を担うこととなり、過重な責務による過労が心配となる。

5. 病いの種類による母親の体験の相違点と共通点

1)【母親の発病による、子どもの現在および将来への悪影響を最小限にする方策を考慮し、子どもの健やかな成長発達を守る】は、病いの種類に関係のない普遍的な母親役割であるが、がん患者においては、死を近い将来のことと自覚せざるを得ず、切迫感をもって、対処に当たっている。

2)【入院時・体調不良時の母親役割の代替者の手配と、家事育児・仕事・看病を担う夫や両親の過労の心配】は、病いの種類ではなく、入院や母親の体調など、母親のおかれた状況によって左右される。

3) 母親のがんの罹患は、家族の危機的状況を引き起こし、家族関係の変化が生じる。一方、慢性疾患を有する母親は、家族全体が危機的状況に陥る程の変化は生じていないが、病いを持つ苦しさを周囲から理解されにくいことで、母親役割の遂行に苦痛を感じている。

4) 母親自身が病いを有した場合(がん・慢性疾患)と母胎の子どもに生命の危機がある場合(切迫早産)では、母親役割に影響を及ぼす原因は異なるが、何れも、子どもの現在および将来を守ることを優先することは共通している。

・主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

・ Makiko KONDO: DECISION MAKING WHEN MOTHERS WITH CANCER REALIZE THEIR OWN IMPENDING DEATH, 18th International Conference on Cancer Nursing (Panama City, Panama), 9/9/2014 .

・ Makiko KONDO : CHANGES IN FAMILY RELATIONSHIPS RECOGNIZED BY FEMALE CANCER PATIENTS WHO HAVE MINOR CHILDREN, The 1st Asian Oncology Nursing Society Conference (Bangkok, Thailand), 22-24/11/2013

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

・研究組織

(1)研究代表者

近藤 真紀子 (KONDO, Makiko)
岡山大学・大学院保健学研究科・准教授
研究者番号: 70243516

(2)研究分担者

秋元 典子 (AKIMOTO, Noriko)
岡山大学・大学院保健学研究科・教授
研究者番号: 90290478

黒田 久美子 (KURODA, Kumiko)
千葉大学・大学院看護学研究科・准教授
研究者番号: 20241979

齋藤 信也 (SAITO, Shinya)
岡山大学・大学院保健学研究科・教授
研究者番号: 10335599

大浦 まり子 (OURA, Mariko)
岡山大学・大学院保健学研究科・助教

研究者番号: 40321260

山田 隆子 (YAMADA, Takako)
岡山大学・大学院保健学研究科・助教
研究者番号: 60382363
(平成26年度)

(3)連携研究者
なし